

イコニオンでも同じように、パウロとバルナバはユダヤ人の会堂に入って話をしたが、その結果、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入った。ところが、信じようとしないうダヤ人は、異邦人を唆して、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。それでも、二人はそこに長くとどまり、主に信頼して堂々と語った。主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである。町の人々は分裂し、ある者はユダヤ人の側に、ある者は使徒の側に付いた。異邦人とユダヤ人が、指導者と一緒になって二人を辱め、石を投げつけようとしたとき、二人はこれに気付いて、リカオニア州の町であるリストラとデルベ、またその近くの地方に難を避けた。そして、そこで福音を告げ知らせた。（使徒14：1～7）

パウロとバルナバは、ピシディア州のアンティオキアに行き、ユダヤ教の会堂で宣教した。モーセの律法を守るのではなく、主イエスを信じる者は皆、この方によって義とされると聞き、異邦人たち、命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。律法に縛られ、良い行いを強要される信仰生活から、信じる者は行いとは関わりなく救いに与るという信仰は素晴らしい解放として人々の心をつかんだのである。主の言葉はこの地方全体に広まった。ところが、ユダヤ教に固執する人々は貴婦人や町の有力者たちを唆して、二人に迫害を加え、町から追い出した。彼らは二人が説く信仰はユダヤ教の信仰と伝統から受け入れられないと考え、反発したのである。二人は彼らに対し抗議の徴に足の埃を払い、イコニオンに向かった。しかし、キリストの福音が受け入れられたことを喜び、聖霊に満たされていた。イコニオンはアンティオキアから東へ百四十キロくらい離れた町である。

パウロとバルナバはイコニオンでも、ユダヤ人の会堂で宣教した。その結果、大勢のユダヤ人とギリシア人が信仰に入った。ところが、信じようとしないうダヤ人は、異邦人を唆して、二人に対して、悪意を抱かせるように働いた。ここでも、律法を厳守するユダヤ教徒はパウロの語る「信仰義認」を排除すべしと拒否したからである。それでも、二人は長く留まり、主イエスに信頼するように揺るぐことなく語り続けた。神は、二人の手を通してしるしと不思議な業を行い、恵みの言葉を証しされた。

ところが、二人の宣教によって町は分裂状態になった。ある者はユダヤ人の側に付き、ある者は二人の使徒の側に付いて、両者は激しい敵対関係に陥った。著者ルカは、この時から、パウロとバルナバを使徒と呼んでいる。古代社会は宗教社会である。どの信仰に立つかは、どうでもいい飾りではなく、命を懸けた重大なことであった。二人の説く福音は、町の人々を二分し、争い合う関係を生み出したのである。そのような中、異邦人とユダヤ人が町の指導者と結託して、パウロとバルナバを辱めた。その辱めは石を投げて、殺そうとするほどのものであった。この殺意に気付いた二人は、イコニオンからリカオニア州のリストラ、デルベ、更にその近くの地方に逃れ、難を避けた。そして、そこでも福音を告げ知らせた。二人にとっては、逃れた所が、そのまま新しい宣教の場であった。

パウロとバルナバがキリストの福音を携え、宣教に向かったが、二人の宣教によって、町を分裂させるほどのインパクトを与えたことに驚き入る。これは、今後の宣教においても、常に見られた状況で、信仰に自分のアイデンティティを確保する宗教社会であったとは言え、福音は時代を切り裂く力を持っていたことの証左である。